

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和4年10月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は12万6556トン、前年同月比98.1%、価格は1キログラム当たり246円、同116.8%となった
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万3601トン、前年同月比98.6%、価格は1キログラム当たり226円、同117.7%となった。
- 過去2～3年は年内の暖冬で、重量野菜は生育が前進し収穫期の集中による採り遅れが恒常化していたが、今年は平年並かやや遅れといった報告が多い。外食産業の売り上げがコロナ禍以前の60～70%といった状況では、野菜価格上昇をけん引するキャベツの価格が依然として低い。12月は野菜全体では平年並かやや高いといったレベルで推移すると予想されるが、トマトやきゅうりは寒波襲来があれば急騰する可能性もある。

(1) 気象概況

上旬は、北・東・西日本では、旬のはじめは高気圧に覆われて晴れたが、旬の中頃からは低気圧や前線、湿った空気の影響で曇りや雨の日が多くなり、北・東日本日本海側を中心にまとまった雨となった日もあったため、北・東日本日本海側の旬降水量はかなり多く、東日本日本海側の旬間日照時間はかなり少なかった。気温は、北・東・西日本では、旬のはじめは暖かい空気に覆われて高温となったが、旬の中頃からは、この時期としては強い寒気が流れ込んだため低温となり、気温の変動が大きかった。旬平均気温は、西日本と沖縄・奄美で高く、北・東日本では平年並だった。旬降水量は、北日本太平洋側で多かった。西日本日本海側と東・西日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、北・西日本日本海側と北・東・西日本太平洋側で少なかった。

中旬は、移動性高気圧が西日本から北日本を通過することが多かった。北・東日本では低気圧の影響を受けにくく、西日本では高気圧に覆われて晴れた日が多かった。気温は、旬の始めと終わりは全国的に寒気の影響を受けたが、旬の中頃は、サハリン付近を通過する低気圧に向かって暖かい空気が流れ込み、北日本を中心に

平年を上回った。旬平均気温は、東・西日本と沖縄・奄美では平年並だった。旬降水量は、北・東日本日本海側と北・東日本太平洋側で少なかった。西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美では平年並だった。旬間日照時間は、西日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。北・東日本日本海側と北・東日本太平洋側では平年並だった。

下旬は、北・東・西日本では、旬の中頃は低気圧や前線の影響で曇りや雨となったが、高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、旬降水量は東日本日本海側と東・西日本太平洋側でかなり少なく、旬間日照時間は北・東・西日本日本海側と北・西日本太平洋側でかなり多かった。気温は、旬のはじめは暖かい空気に覆われやすく全国的に平年を上回ったが、旬の中頃は強い寒気が流れ込んだため、東日本を中心に低温となり、東日本の旬平均気温はかなり低く、北・西日本と沖縄・奄美では平年並だった。旬降水量は、北・西日本日本海側と北日本太平洋側で少なかった。旬間日照時間は、東日本太平洋側で多かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本									
東日本				日本海側 太平洋側 					
西日本									

資料：気象庁「10月の天候」



(2) 東京都中央卸売市場

10月の東京都中央卸売市場における野菜の

入荷は、入荷量は12万6556トン、前年同月比98.1%、価格は1キログラム当たり246円、同116.8%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（10月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	126,556	98.1	93.7	246	116.8	108.1	257	247	237
だいこん	11,499	108.2	98.9	99	108.2	111.3	127	106	76
にんじん	7,506	83.3	86.6	173	228.1	144.6	172	179	169
はくさい	15,117	98.9	87.6	79	126.4	114.6	81	92	64
キャベツ類	17,294	101.3	97.3	75	97.3	97.7	78	72	75
ほうれんそう	1,351	92.6	99.9	606	121.6	106.5	708	597	555
ねぎ	5,382	109.1	103.1	359	137.8	102.6	393	394	304
レタス類	8,049	91.6	95.9	202	153.5	135.3	191	188	233
きゅうり	5,168	89.6	90.3	368	137.2	106.2	321	363	426
なす	2,523	87.0	92.0	335	122.5	96.6	330	334	339
トマト	5,056	86.8	88.0	532	133.6	117.1	516	530	551
ピーマン	2,119	86.0	100.7	366	143.5	94.4	313	349	437
さといも	990	94.7	97.2	333	120.0	107.8	337	348	318
ばれいしょ	7,254	120.0	99.5	109	60.6	90.7	116	108	106
たまねぎ	9,462	107.0	94.5	104	87.6	115.4	108	104	101

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、不足感から月間を通して堅調な動きとなり、大幅な安めに推移した前年の2倍以上となり、平年を4割以上上回った(図2)。

葉茎菜類は、ねぎの価格が、中旬以降落ち着きを見せたものの、安めに推移した前年を4割近く上回り、平年をわずかに上回った(図3)。

果菜類は、トマトが東北産の減少に伴い下旬に価格を上げ、前年を3割以上上回り、平年を2割近く上回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が大幅に高めに推移した前年を1割以上下回り、平年を1割以上上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2のとおり。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

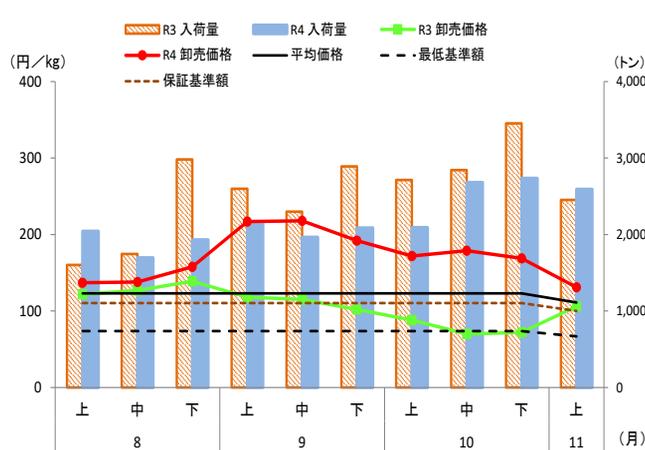


図3 ねぎの入荷量と卸売価格の推移

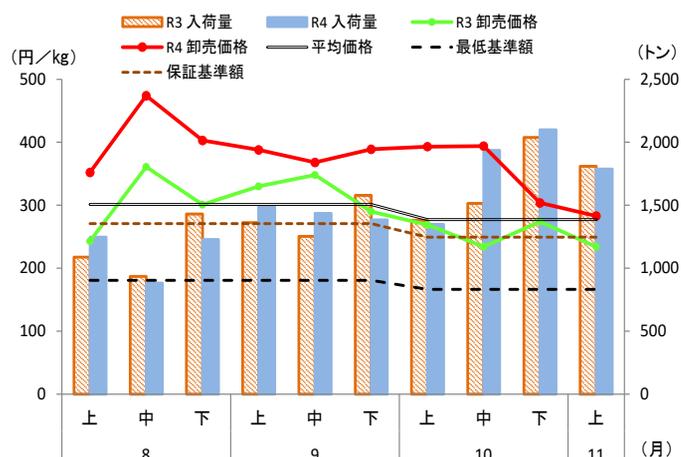


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

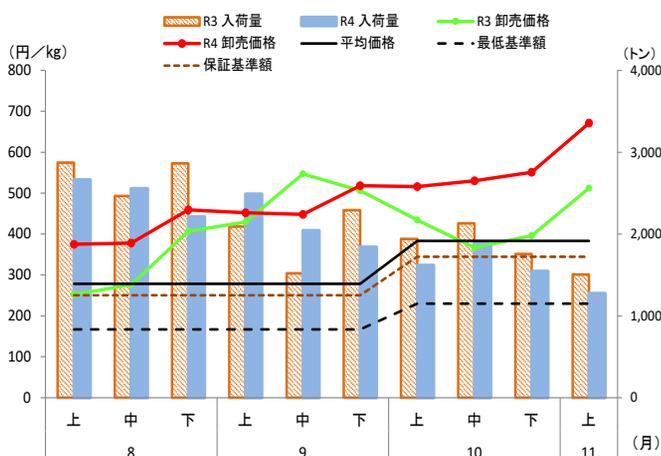
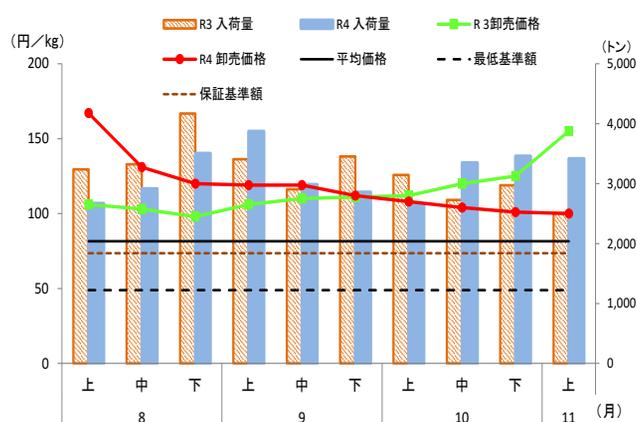


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※1 卸売価格は、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※2 平均価格は、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6力年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>千葉産、青森産を中心に北海道産の入荷があった。千葉産の作付けは前年並で、病虫害の発生も少なく、発芽、生育ともに順調。青森産の作付けは前年並で、8月の大雨の影響による遅れから回復傾向にあり肥大は良好。病虫害の発生も落ち着いているが全体数量は少ない。北海道産の作付面積は前年並から一部減少し、降雨による生育遅延や品質低下で歩留まりが低下している。終盤を迎え漸減。総入荷は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は千葉産の増量に伴い下旬に向け価格を下げたものの、前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	にんじん 	<p>北海道産中心の入荷となった。作付けは前年並から一部産地で減少した。8月までの大雨と高温の影響で収穫遅れや品質低下が見られたが、9月中旬以降回復傾向。生育はおおむね順調であったが断続的な降雨から割れや病害が散見された。総入荷はやや多かった前年を2割近く下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は不足感から月間を通して堅調な動きとなり、大幅な安めに推移した前年の2倍以上となり、平年を4割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>長野産中心の入荷で茨城産が後続となった。長野産の作付けは前年並。高温・干ばつの影響による生育遅延から適度な降雨で回復し、生育は順調で出荷もピーク。茨城産の作付けは前年並から一部減で、生育は順調。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は茨城産の開始に伴い、下旬に向け価格を下げたものの、安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>群馬産を中心に後続の千葉産、茨城産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並で、一部で天候不順による湿害が散見されたものの、生育は順調。ピークは越えて漸減となった。千葉産の作付けは前年並で、播種(はしゅ)、定植時期も前年並で生育は順調。茨城産も作付けは前年並で生育は順調。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は切れ目のない入荷から月間を通してあまり動きが出ず、前年、平年ともわずかに下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>群馬産、茨城産を中心に関東産の入荷があった。各産地とも作付面積は前年並で、播種は順調も、盆以降の高温や多雨、9月以降の極端な気温の上下により、特に露地作については全体的に圃場(ほじょう)でのロスが散見された。総入荷量はやや多かった前年をかなりの程度下回り、平年並となった。</p> <p>価格は露地作の開始に伴い中旬以降落ち着きを見せたものの、露地作の増量が鈍かったことから下がりがきらず、安めに推移した前年を2割以上上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ねぎ 	<p>秋田産中心に、青森産、北海道産などの他、後続の関東産地からの入荷があった。秋田産の作付面積は前年を上回り、8月の大雨による水害により、軟腐病などの病害が多発。青森産の作付面積は前年並で、8月の大雨の影響で一部品質低下がみられるものの回復傾向。北海道産の作付けは前年並で、生育は順調に推移していたが一部産地で大雨の影響による品質低下、細物が多い。関東産は作付けは前年並で、定期的な降雨により全体的にやや前進から前年並となっている。一部害虫の発生が散見されるものの、おおむね順調。総入荷量は少なめであった前年を1割近く上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は稲刈りなどが終了してねぎの収穫作業が進んだ中旬以降落ち着きを見せたものの、安めに推移した前年を4割近く上回り、平年をわずかに上回った。</p>
レタス類 	<p>茨城産を中心に後半は長野産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並で、病虫害も少なく生育は順調も、雨の影響で一部品質低下が散見された。長野産の作付けは前年並で、気温の低下に伴い例年より生育はやや停滞気味も、残量はそれほど多くない。総入荷量は多かった前年を1割近く下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は大幅に安かった前年を5割以上上回り、平年を3割以上上回った。</p>	

果菜類	きゅうり 	群馬産、埼玉産など関東産中心の入荷となった。東北産は終盤。群馬産の作付面積は前年並で、日照不足により草勢がやや弱い为天候の回復に伴い回復。虫害の発生がやや多い。埼玉産の作付面積も前年並で、生育はおおむね順調だが病虫害の発生が散見された。総入荷量はやや多かった前年を1割強下回り、平年を1割弱下回った。 価格は大幅に安かった前年を4割近く上回り、平年をかなりの程度上回った。
	なす 	高知産を中心に関東産の終盤の入荷があった。高知産の作付面積は前年並で、生育はおおむね順調でやや前進気味であったが、病虫害の発生が散見されている。総入荷量は多かった前年を1割以上下回り、平年を1割近く下回った。 価格は月間を通して安定しており、安かった前年を2割以上上回り、平年をやや下回った。
	トマト 	千葉産を中心に東北産、北海道産の終盤の入荷となった。東北産、北海道産は中旬以降漸減した。千葉産の作付面積は前年並で、高温の影響による着果不良や、受精の低下が見られた。一部で病虫害の発生も散見された。総入荷量は少なかった前年と平年をかなり大きく下回った。 東北産の減少に伴い下旬に価格を上げ、前年を3割以上上回り、平年を2割近く上回った。
	ピーマン 	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年をやや下回り、秋作の生育は順調も、虫害が散見された。総入荷量は多かった前年を1割以上下回り、平年をわずかに上回った。 価格は大幅に安かった前年を4割以上上回り、平年をやや下回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並で、8月の適度な降雨と天候に恵まれ生育はおおむね順調で品質も良好。中国産の輸入は前年を3割近く下回った。総入荷量は前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。 価格は安めに推移した前年を2割上回り、平年をかなりの程度上回った。
	ばれいしょ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並で、低温・干ばつ傾向から8月の豪雨の影響により、地域差もあるが玉数は多い。小玉傾向も各産地出揃い全体としては豊作基調。総入荷量は少なかった前年を2割上回り、平年をわずかに下回った。 価格は大幅に高かった前年を4割近く下回り、平年を1割近く下回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並で、8月に入っの大雨の影響を受けた地域はあるものの、全体としては作柄良好で、収穫も順調に進み肥大は十分。中国産の輸入は前年の半分以下となっている。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。 価格は大幅に高かった前年を1割以上下回り、平年を1割以上上回った。

(執筆：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

10月の大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万3601トン、前年同月比

98.6%、価格は1キログラム当たり226円、同117.7%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向 (10月速報)

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	43,601	98.6	96.5	226	117.7	110.6	235	222	224
だいこん	4,241	103.5	90.6	112	112.0	119.3	130	113	96
にんじん	3,154	101.6	101.2	168	243.5	144.1	166	177	160
はくさい	7,008	95.1	100.2	83	138.3	123.4	82	95	70
キャベツ類	5,924	94.7	98.0	81	101.3	101.4	83	76	85
ほうれんそう	404	80.0	86.1	758	119.7	107.7	899	751	690
ねぎ	1,207	100.3	103.7	455	126.4	98.4	508	479	395
レタス類	1,500	72.6	72.4	233	194.2	156.9	236	216	252
きゅうり	1,123	85.1	96.3	367	145.6	108.4	333	356	416
なす	752	93.9	112.6	363	148.2	112.7	371	355	364
トマト	1,378	83.3	88.6	574	138.0	120.4	571	566	584
ピーマン	537	92.9	96.9	404	134.7	101.4	358	395	468
さといも	187	94.0	90.1	312	110.6	100.5	316	324	302
ばれいしょ	3,120	135.5	109.4	96	60.0	89.6	95	97	96
たまねぎ	4,859	111.7	96.0	113	91.1	123.1	120	111	109

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向 (大阪市中央卸売市場)

類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産を中心に、青森産、石川産、新潟産も主体となる入荷であった。全旬とも潤沢な出荷が続く、前年が少なかったこともあり、前年比1.5倍以上の入荷が続いた。青森産も順調であったが中旬をピークに減少傾向となり、月間では前年を大幅に下回る入荷量にとどまった。石川産と新潟産は伸び悩み、月間で前年をかなり下回る入荷量となり、岐阜産は残量入荷があったが中旬で切り上がった。月間全体では前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。 引き合いが強く、荷動きも活発で単価高での推移となったが、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。
	にんじん 	北海道産の入荷であった。夏の降雨の影響による品質低下で少なかった入荷量が前月終盤から回復傾向となり、中旬以降は太物傾向となったため増量した。輸入の中国産の入荷量が多く、全旬とも前年の5倍以上となった。月間全体では前年、平年ともわずかに上回った。 不足感から高騰が続いていた影響が残り、価格は高値のまま推移を続けた。月間では前年の2.5倍近くにまでなり、平年を4割以上上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産を中心とする入荷に、中旬以降は茨城産や群馬産もスタートした。長野産は中旬にピークを迎えたが、急な冷え込みから下旬に向けて出荷量が激減し、下旬の入荷量は前年を大幅に下回った。月間でも前年をかなり下回った。茨城産は順調なスタートで徐々に増量となったが、月間全体では前年をやや下回り、平年並となった。 量販店が必要期に入って引き合いが強く、また特売が多く発注量も増えたため、入荷減量に伴って中旬に価格は急伸した。下旬には落ち着きを見せたが、月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。

<p>キャベツ類</p> 	<p>夏秋産地の群馬産と長野産が主体となり、中旬以降は後続の茨城産や愛知産の入荷も始まった。群馬産と長野産は中旬がピークとなったが、急な冷え込みから下旬に激減し、下旬の入荷量は前年の半分以下となった。茨城産と愛知産は順調な出荷となったが下旬の夏秋産地の減量を補うに至らず、月間全体では前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は中旬に各産地からの入荷が重なったことで下落したが、下旬に激減したことで上伸した。月間では前年、平年ともわずかに上回った。</p>
<p>ほうれんそう</p> 	<p>岐阜産を中心とする入荷に、後続の徳島産が中旬以降に始まった。岐阜産は低温による生育不良から産地出荷量が伸び悩み、全旬を通じて前年の半分程度にとどまった。後続産地など他産地の入荷は順調であったが補填(ほてん)しきれず、月間全体でも前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>不足感から単価は高値スタートとなったが、量販店などの末端の売価が高く、売れ行きが悪い状況が続き、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
<p>ねぎ (白ねぎ)</p> 	<p>長野産を中心に北海道産、鳥取産、群馬産も主体となる入荷であった。長野産は中旬がピークとなり、下旬は急な冷え込みで減量となったが、上中旬は前年を大幅に上回り、月間でも前年をかなり上回った。北海道産は前年の半分程度にとどまったが、他産地は順調な入荷を続け、月間全体では前年並の入荷量となった。</p> <p>需要期に入り、量販店の売場が作られて中旬以降の急な冷え込みから需要が高まり、価格も上昇した。月間では前年を大幅に上回った。</p>
<p>ねぎ (青ねぎ)</p> 	<p>徳島産を中心に香川産や近隣の奈良産、大阪産などの入荷があった。下旬に急な冷え込みから入荷減量となったが、月間では前年をやや上回った。細ねぎは高知産を中心に大分産や静岡産の入荷があったが、前月の台風の影響が残り、産地出荷量は少ないままで伸び悩み、月間では前年を大幅に下回った。青ねぎ類全体では前年を若干上回った。</p> <p>青ねぎは末端での荷動きが悪く、単価は伸び悩み前年をやや下回った。細ねぎは絶対量不足から高値推移が続き、前年を上回った。青ねぎ類全体では前年をやや下回った。</p>
<p>レタス類</p> 	<p>長野産を中心として、茨城産や後続の兵庫産、徳島産の入荷が下旬から始まった。前月の台風の影響から生育が悪く、月の後半の急な低温や干ばつが影響し、生育が回復しない中で入荷減量となった。月間では前年の半分程度となった。サニーレタスは長野産を中心に後続の福岡産も月の後半にスタートしたが、玉レタス同様少なかった。リーフレタスは長野産の残量が少なく前半で切り上り、後続の福岡産が中心となったが、玉レタス同様、生育遅れて入荷量は伸び悩んだ。レタス類全体は前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>絶対量不足と後続産地の遅れから価格は高騰し、月間では玉レタス、サニーレタスは前年の2倍以上、リーフレタスも前年の2倍近く上回った。レタス類全体でも前年の2倍近く上回り、平年を5割以上上回った。</p>
<p>果菜類</p> <p>ぎょうり</p> 	<p>群馬産を中心に秋産地の大阪産や後続の冬春産地の宮崎産、福島産の残量入荷などがあつた。群馬産は中旬をピークに急な気温低下から下旬に入荷減量となったが、前年よりかなり多い入荷量となった。福島産は上旬で切り上り、宮崎産は月の後半の低温で出荷量が増えず入荷減量となった。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。</p> <p>量販店などの特売需要が多く、価格は入荷減量に伴って旬を追うごとに上昇した。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
<p>なす</p> 	<p>千両系は高知産を中心に京都産や奈良産などの入荷があつた。長茄子は熊本産、愛媛産に後続の福岡産が主体となった。夏秋産地は前月の台風の影響が残り、産地残量が少なく入荷減量となった。後続の産地も前半はやや出遅れて入荷量が伸びずに、月間全体でも前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は不足感から高値推移が続いた。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>

	 <p>トマト</p>	<p>岐阜産を中心に千葉産や愛知産などの入荷があった。夏秋産地は終盤で出荷は不安定、後続の冬春産地の熊本産などはまだ始まっておらず、端境となり少ない入荷量が続いた。月間全体では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>品薄感と後続産地のスタートが不透明な中、価格は高値推移が続いた。全体では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
	 <p>ピーマン</p>	<p>高知産を中心として茨城産や長野産などの入荷があった。前月の台風の影響から夏秋産地の残量が少なく、入荷量も伸び悩んだ。後続の産地は急な低温の影響からスタートが遅れ、端境となったため全体としても入荷量は少なく、前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>品薄感と後続産地の見通しが悪いことから価格は高値で推移し、旬を追うごとに上伸した。月間では前年を大幅に上回り、平年をわずかに上回った。</p>
土物類	 <p>さといも</p>	<p>国産は愛媛産を中心とする入荷であった。月の前半は気温が高く、量販店での需要もなく荷動きが悪い中、発注数は伸び悩み入荷減量となった。輸入の中国産の入荷もあったが量は少なかった。月の後半は気温が下がり、一定の需要もあったが伸び悩み、月間では前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>価格は引き合いが少ないことから伸び悩み、安かった前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	 <p>ばれいしょ</p>	<p>丸芋、メークインとも北海道産の入荷であった。どちらも前月に引き続き産地出荷量が多い中、全旬を通じて潤沢な入荷が続いた。月間全体でも前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>月の前半は気温高が続き、量販店での荷動きは鈍く販売には苦戦した。価格は伸び悩み、前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	 <p>たまねぎ</p>	<p>北海道産を中心に兵庫産の入荷があった。北海道産はJAによっては産地での出荷調整があった。各産地とも早生種に切り替わり、L大中心の入荷となった。中国産をはじめ輸入物の入荷もあった。上旬は入荷が伸び悩んだが、中旬以降は順調な入荷となり、月間では前年をかなり大きく上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は前月まで高値推移が続いていたが、入荷が安定してきたことで落ち着き、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に上回った。</p>

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした12月の見通し

資材費や肥料代の高騰で生産者は赤字が続いているとの悲鳴も聞かれる。燃料を使用する期間をできるだけ短く、設定温度をぎりぎりに下げるのは、結局生育遅れと生産量減少をもたらすと思われ、果菜類は若干少なめの状況が長く続くと予想される。

過去2～3年は年内の暖冬で、重量野菜は生育が前進し収穫期の集中による採り遅れが恒常化していたが、今年は平年並かやや遅れといった報告が多い。外食産業の売り上げがコロナ禍以前の60～70%といった状況では、野菜価格上昇をけん引するキャベツの価格が依然として低い。12月は野菜全体では平年並かやや高い

といったレベルで推移すると予想されるが、トマトやきゅうりは寒波襲来があれば急騰の可能性もある。



根菜類

だいこんは、神奈川県産が11月に入って始まったばかりで、12月10日頃から出揃ってこよう。生育は順調で、11～12月は今のところ前年並を予想している。「三浦大根」は12月24～26日の3日間の出荷予定であり、今年の作付は前年の110%と増えている。千葉県産の生育は順調で、現在出荷のピークに入っているが、

12月にはさらに数量は増えてこよう。前年は出荷調整で数量が抑えられたが、今年はその分前年を上回ると予想している。

にんじんは、埼玉産の現状は例年より7~10日の遅れになっているが、台風の影響や10月の低温により肥大が遅れている。当面のピークは11月下旬から12月いっぱい予想している。千葉産は7月20日過ぎに播種した物が8月上旬の台風による風にあおられ、一部蒔き直しも行われた。さらに8月の豪雨で流されるなど順調でないが、9~10月の好天でかなり回復しており、定植できずに遅れた分も通常に戻る可能性もある。状況が悪くなれば12月中下旬の出荷は例年を下回る可能性もある。香川産の出荷は始まっており、12月が最大のピークで、1月にはかなり少なくなる。台風の影響もなく作付け作業は順調で、現状は天候に恵まれやや前進気味である。作付けは前年並である。



葉茎菜類

キャベツは、愛知産の現状は平年より早めの出荷になっている。今後も年末に向けて順調に増えて1~2月に最大のピークを迎えよう。12月も引き続き8玉サイズが80%以上と平年並みの大きさを予想している。千葉産は始まっているが11月15日頃から増えて、12月に入りさらに増えて、年明けはやや減るといった展開になると予想される。春系が60~70%を占め、残りが寒玉に近いタイプと予想される。12月は前年並を予想している。神奈川県産の当面は寒玉に近いタイプの品種となり、11月後半から増えて2月までの出荷と予想され、8玉中心に前年並みの見込みである。

はくさいは、茨城産の現状はやや遅れており、播種時期の雨やその後の寒さが影響している。巻き上がりが遅れており、小ぶりに仕上がる可能性もある。12月の出荷量は前年の90%程度と予想している。

ほうれんそうは、埼玉産の出荷のピークは12月10~29日になると予想される。作付けは前年並で、作業は天候に恵まれ順調である。

群馬産の天候は比較的安定しており、順調な出荷となっている。10月に低温で遅れた部分もあるが、現在は取り戻している。12月は気温も下がって現状よりも減ってくるが、例年どおり出荷できると予想される。

ねぎは、千葉産の冬ねぎの生育は順調で、11月に入り増え始めると予想される。ピークは1~2月であるが、12月も不作気味であった前年を上回る出荷と予想される。群馬産の「下仁田ねぎ」は10月23日の販売から例年並に始まり、生育順調である。出荷のピークは12月で、年明けには減りながら推移すると予想される。9月の長雨により作柄が悪かった前年より出荷は上回ると予想される。作付けは前年並である。茨城産は秋冬ねぎとなるが、過去2年は自然災害の影響で少なかったことから、この12月は例年を上回る出荷が予想される。Lサイズ中心に高品質物が出荷されると予想される。

レタスは、静岡産は10月28日からスタートし、ほぼ平年並みである。台風15号の影響で11月中旬までの物はやや小さめと予想される。年内出荷物の作付計画は前年の98%であるが、12月の出荷はほぼ前年並と予想している。肥料価格と被覆資材の高騰が経営に影響を与えている。長崎産の生育は順調であるが、現状はやや干ばつ気味により遅れている。11月中旬頃にピークが来て、12月に入り寒さからやや減ると予想される。台風の影響はなく、2月には再び増えると予想され、作付けは前年並である。香川産は11月に入って出荷が始まり、例年並みのペースで、ピークは年末になると予想している。作付けは前年並みで、出荷も前年並みを予想している。



果菜類

きゅうりは、高知産の冬きゅうりは現状始まっており、6月まで長期間収穫される。前年と比べると7~10日の遅れとなっており、例年より寒いことが影響している。木の成長は問題なく11月下旬にピークが来て、12月いっぱい落ち込みのない出荷が続くと予想される。作付

けは96%と減っているが、資材の高騰や市場価格の低迷により作付けを止める農家がいるためである。宮崎産はこのままの天候でいけば、年内から年明けは安定して出荷できるであろう。一部台風で被覆が剥され作付けが遅れたが、作付けそのものは前年並である。12月も安定的な出荷を目指している。千葉産は11月に入り増え始めてきた。現状は天候も問題なく前年並の出荷を予想している。

なすは、高知産は9~10月は出荷が伸びたが、11月以降の成り疲れが心配される。今年から新品種「PCお竜」に切り替えた農家がいるため、状況がつかみにくい。作付けは前年並で、出荷も引き続き前年を上回ると予想している。福岡産は台風の接近もあって定植を遅らせた影響もあり、7日程度の遅れになっている。11月10日以降本格的に増えてくるが、12月も問題なく、特に中下旬に多くなると予想される。作付けは前年並である。

トマトは、熊本産は現状遅れはないが、生育初期の高温により小玉のうちから色付きが早かった影響で数量が減っている。当面は11~12月が出荷のピークと予想される。前年は病気(黄化葉巻病)でやや不作であったことから、12月は前年を上回る出荷と予想している。愛知産の生育は順調であるが、現状は9月の天候不順で成りが悪く少なめの出荷となっている。11月中下旬から増えてきて12月は例年どおり、L・Mサイズ中心の出荷と予想される。ミニトマトは、熊本産は低温により現状は出遅れている。12月には本格化して問題ない出荷と予想される。面積は前年並である。

ピーマンは、茨城産の秋ピーマンは12月上旬までであるが、その後は温室ものが中心となり、作付けは前年の92%と減っている。燃料の高騰や病害虫の多発が影響している。11月からピークなく続くが、12月中下旬には植え替えが始まりやや減ると予想される。宮崎産は出荷が始まっているが、生育はおおむね順調である。年内のピークは11月下旬に来て、次は12月下旬である。作付けは前年並みで、天候に恵まれ前年を上回る出荷が予想される。



土物類

さといもは、埼玉産の現状は収穫作業のピークであるが、昨年に近い豊作と予想している。天候に恵まれ品質良好で、L・2Lサイズ中心と予想される。12月がピークで、前年並の出荷と予想される。新潟産は10月中旬から始まり、年明けも引き続き2L・Lサイズ中心に出荷できると予想される。

ばれいしょは、北海道産は道南の産地からとなる。男爵の収穫量は前年の105%と微増であるが、昨年は干ばつで平年を下回ったため、豊作ではない。全般に小玉の仕上がりで、M・Sサイズ中心である。年明け3月まで計画的に出荷していく。でん粉含有量も高く、高品質に仕上がった。

たまねぎは、北海道産の現状はほぼ収穫作業は終わった。収量は前年並みで、不作気味であった前年の120%程度と予想している。肥大も問題なく、L大中心に5月まで計画的に出荷していく。



その他

ブロッコリーは、愛知産の現状は干ばつ気味の影響で少なめの出荷となっている。1~2月が最大のピークであるが、作付けは前年並で年内も例年並みに出荷できると予想している。香川産は10月に入って出荷が始まり、春まで続く。前年並の出荷と予想している。

いちごは、栃木産の本格的出荷は11月中旬から。12月上旬にピークが来ると予想している。「とちおとめ」が70%「とちあいか」が30%。全体の作付けは前年並み、好天が続き過ぎると一気に出荷されクリスマス前に少なくなる可能性もあるが、今年は遅れ気味で現状少なめとなった前年を上回ると予想している。福岡産は11月7日から始まったが、昨年より7日遅く、前年並みである。作付けは前年並みであるが、例年より病気の発生が多く育苗時期の天候がやや悪かったと推測される。現状は日照

時間が長く、やや前倒し気味になると予想している。気温が高くなれば12月前半に増え、クリスマス前に少なくなる心配もある。逆に日照不足で寒い日が続くと後ろにずれて、年末年始にピークが来る可能性もある。

かぼちゃは、北海道産は豊作傾向であったが、12月の出荷は前年並を予想している。11月中旬で一旦共同選果は終わるが、個人での出荷は続く。12月1日に再び開始し、12月中旬いっぱいまで。「くりゆたか」の5玉サイズ中心の出荷と予想している。鹿児島産が12月2日頃から始まるが、生育は遅れている。2～3週目がピークとなり、一部年明けにも残ると予想される。品種は「えびす」中心で、作付けは例年同様30ヘクタールである。

かんしょは、千葉産の現状は収穫が80%程度終わったところである。天候に恵まれ豊作気味で、11～12月は前年を上回る出荷が予想される。年内は「シルクスイート」と「ベニアズマ」で、年明けから「べにはるか」が増えると予想される。茨城産の現状は収穫が60%程度終わり、豊作気味である。年内は「べにはるか」中心で、年明けは「べにまさり」が増えてくると予想される。徳島産は11月中旬から12月いっぱいまで出荷のピークと予想される。今年は天候に恵まれ収量多く、前年を上回る出荷が予想され、サイズはM中心である。

ごぼうは、熊本産は干ばつが続いて7日程度の遅れになっている。12月中旬から安定して出荷できるであろう。作付けは増えており、3月いっぱいの出荷となるが前年を上回ると予想される。青森産は夏の豪雨が長く続いたことから20～30%減少している。また短くて太りも悪く、A品が少ない。

れんこんは、茨城産の今年は平年作で、台風や天候不順で不作であった前年をかなり上回ると予想される。12月下旬をピークにMサイズ中心の出荷である。

ながいもは、青森産は11月10日から出荷開始し、15日から新芋の出荷が始まる見込み。8月の豪雨の影響で、試し掘りの結果ではA品率が低い見込みである。収量も例年の70～80%程度と少ないと予想される。そのためLサイズ中心で2L、3Lはかなり少ない見込みである。

くわいは、広島産の東京市場での販売は11月10日頃からと予想している。12月24日販売で切り上がろう。昨年は平年作であったが、後半の物が大きくなった。今年の面積は前年並であり、量的にも前年並と予想している。

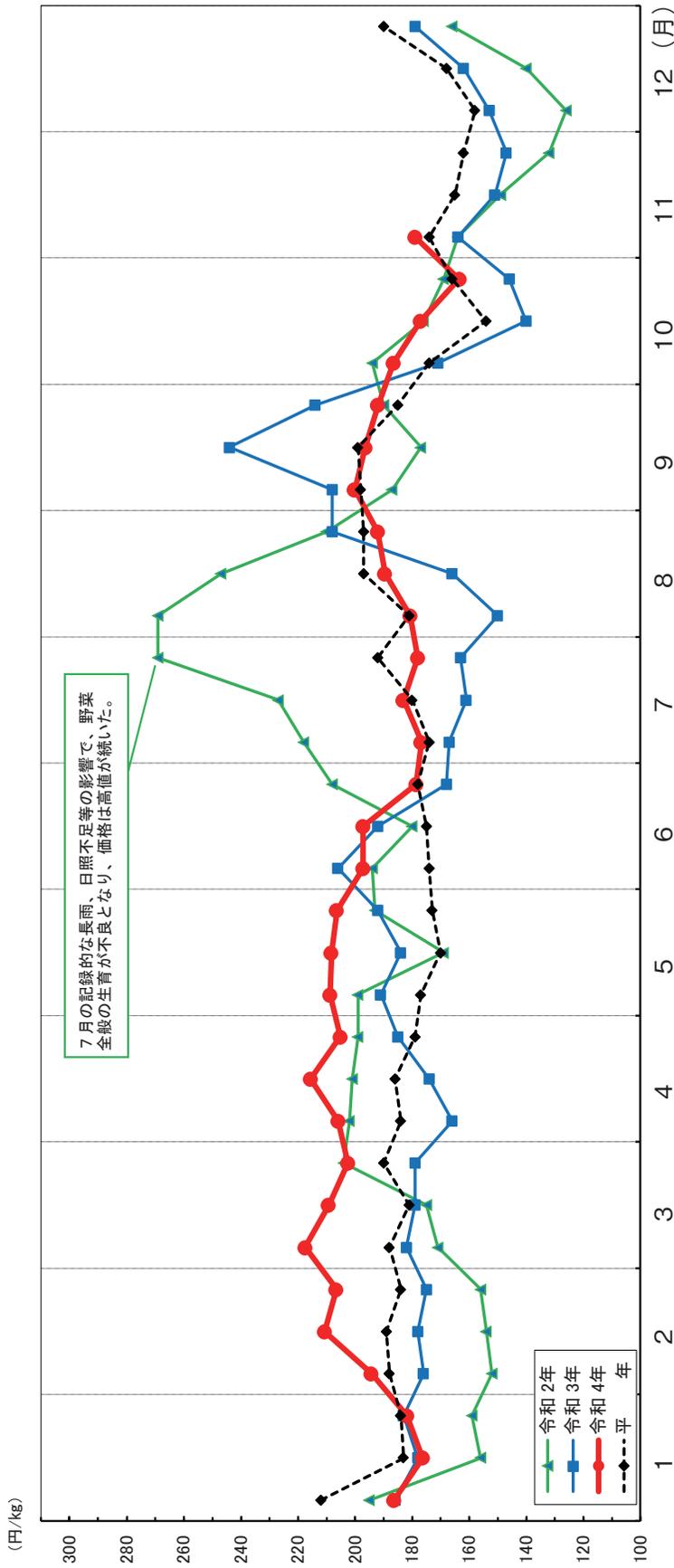
七草は、佐賀産が12月28日から29日、その後の休市中と初市の5日まで連日の出荷予定である。現状の各野菜の生育は順調で、出荷は九州各地と東京市場中心である。

せりは、宮城産の「仙台ぜり」は現在も連日全国市場へ出荷しているが、ピークは年末である。作付けは前年並で、100グラム結束物で30束入り段ボールで出荷している。

ゆずは、高知産の収穫量が前年の40%の裏年傾向と予想している。さらに前年9～10月の雨が少なかった影響も残っている。12月の出荷に全体の80～90%が集中し、年明けも貯蔵物となり、若干の出荷は続く。今年は特に大玉傾向で外観は良好である。

(執筆者：千葉県立農業大学校 講師
加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

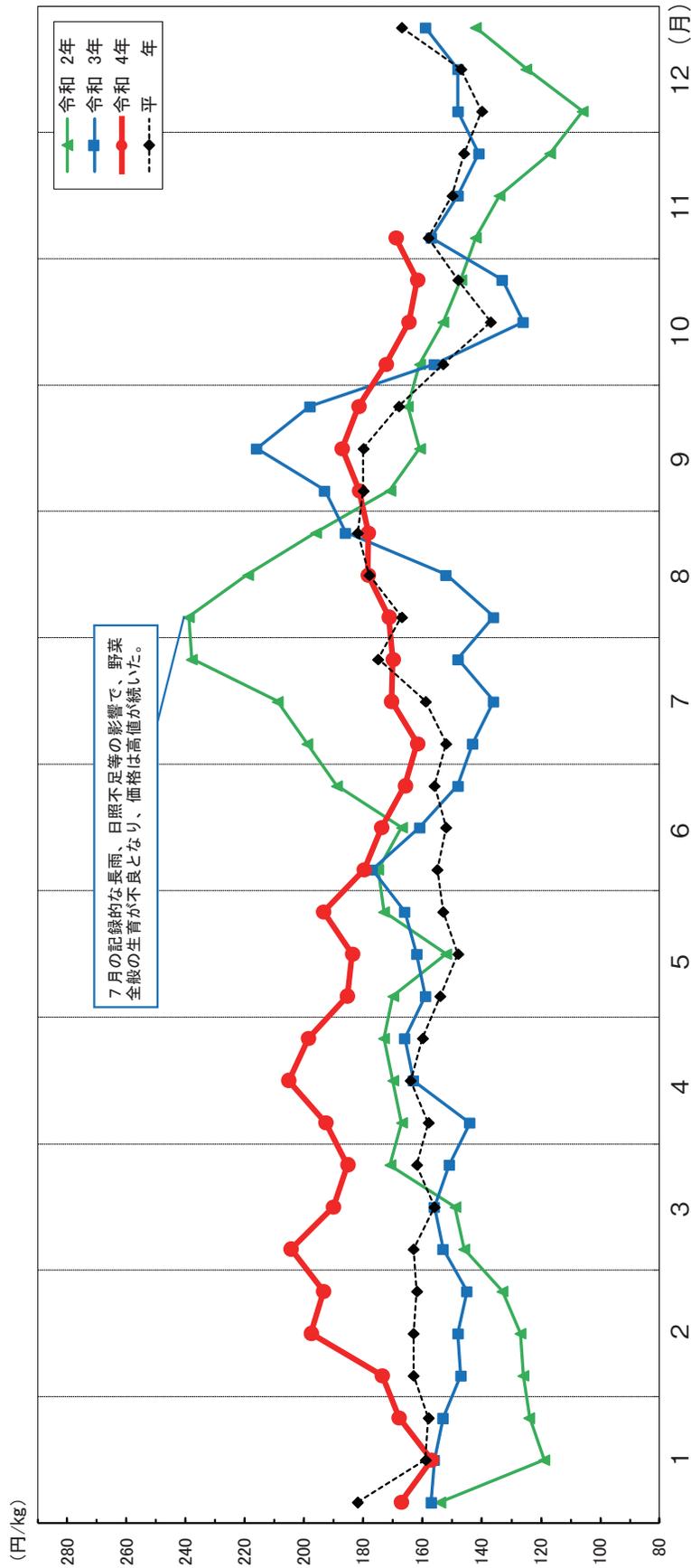
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬																																		
令和2年	195	156	159	152	154	156	171	175	204	202	201	199	199	169	193	194	180	208	218	227	269	269	247	210	187	177	190	194	176	169	164	149	132	126	140	166
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179	
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179					
平年	212	183	184	188	189	184	188	181	190	184	186	179	177	170	173	174	175	178	174	180	192	181	197	197	198	199	185	174	154	166	174	165	162	158	168	190

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	下旬																																		
令和2年	154	119	124	126	127	133	146	149	171	167	170	173	175	167	189	199	209	238	219	196	171	161	165	161	153	147	142	134	117	106	125	142				
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	159		
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169						
平 年	182	159	158	163	163	162	163	156	162	158	164	160	154	148	153	155	152	156	152	159	175	167	178	182	180	180	168	153	137	148	158	150	146	140	147	167

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
 注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。
 注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。